
恋愛模様 共通編

土屋 ハヤト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛模様 共通編

【Nコード】

N0324Y

【作者名】

土屋 ハヤト

【あらすじ】

恋愛つてのがよく分からない。そんな高校生『上村伊吹』を中心に回り始めた夢くて、ドキドキで、温かい20の恋の物語。

プロローグ（前書き）

初めまして土屋ハヤトです。

この小説を読もうと思って貰いありがとうございました。

この小説は私が初めて書くラブコメなので色々問題もあると思いますが温かい目で見て貰ったら幸いです。

プロローグ

ジュリアに会って俺は人のつながりを

式季に会って守る難しさを

遊香里に会って出会いと別れを

奏に会って一歩踏み出す勇気を

悟先生に会って人の温かさを

冷に会って失っても残り続ける心を

そよに会って自分の価値を

華乃に会って過去との決別を

七海に会って運命にあらがう強さを

ふぁみ先輩に会って……持病の片頭痛が悪化した

めいちゃんに会ってあいつと向き合えた

かもめさんに会って信じ続ける強さを

初に会って家族を

愛佳に出会って受け入れる意味を

美崎に出会ってつまらない世界を

くいなに出会って生きたいと

ぼえみに出会って彼女の脆さを

舞に出会って心の弱さを

閑先輩に出会って過去を乗り越える強さを

桜美に出会って

色んな人に出会い恋をして

僕の周りを彩る模様は

無数の広がりを見せて行く

これは小さく大きな恋の物語

恋愛模様

春風のプロローグ？（前書き）

それでは本編スタートです。

春風のプロローグ？

4月7日（木）

京矢「合コンがしたい！！」

突然親友が合コンをしたいなどと口走り始めた。

伊吹「すれば、俺抜きで」

俺は流した。

京矢「なあ、なあ！！絡もうぜ合コンに行こうぜ！！」

伊吹「別にいいよ。興味ないし」

京矢「興味ないだ！？それでもお前日本男児か！？あの女を8股にかけて傍若無人の限りを尽くしていたお前は何処に行ってしまったんだ」

伊吹「俺の知ってる日本男児はもつと仁義を大事にしてた。あと、ありもしないことを事実みたいに話すのは止めてくれ。俺がそう見られるから」

事実、登校途中の学生たちが俺たちを変な目で見ている。周知の目が痛い。

伊吹「っていうかさ、お前彼女いなかったっけ？」

京矢「うにゃ？」

俺の親友、城島京矢は俗に言うイケメンと呼ばれる部類だ。その上リーダーシップがあつて学校では生徒会会計。バイトではバイトリダー。まさに俺とは違って出来た人間だ。

京矢「実は振られちまって・・・」

伊吹「またか」

ただこいつの悪いところは恋より友情などを一番にしてしまうところだ。

京矢「だからこそ本当のレディーに出会った」

こいつは口では合コン合コン言ってるが、本当は自分のことを分かってくれる女性を見つけたいんだと思う。

京矢「お前も行くって伊吹」

伊吹「俺は止めとくよ」

京矢「まったく。ホントお前って女の子関係で浮ついた話がないよな」

俺には女の子との浮ついた話がない。別に男が好きだったり、女の子の友達が少ない訳じゃない。

伊吹「分からないんだよ。恋とか恋愛とかそういうの」

京矢「もったいねえな。素材はいいのに」

伊吹「それでもお前のほうがカッコいいから霞んで見えるんだよ」

京矢「きつとお前のことを分かってくれる女の子に出会えるはずさ」

京矢が俺の肩をポンと叩いた。

伊吹「だといいんだけどな」

~~~~~

新学期のクラス発表を見に校内の掲示板を見に来たがかなりの同級生がそこにはいた。

京矢「さくって俺らのクラスは何組かな」

伊吹「今年くらいお前と別のクラスにならないかな」

京矢「つれないな伊吹」

??「そうだよ。2人はまた同じクラスだよ。2人はきつと運命の赤い糸で繋がってるんだね。」

伊吹・京矢「繋がってねえよ!!」

??「ふふふ、ごめんごめん」

俺たちを茶化した茶髪のショートカットの女の子。

??「今学期も宜しく!!」

この子の名前は『井國舞』。去年からの同級生で俺や京矢と何かと意気があつてつるみ始めた友達だ。

舞「春休みも終わったのに元気だね お二人さん」

性格派明るくてクラスのムードメーカー。

京矢「舞ちゃんは春休みは部活だったのか？」

舞「うん。走つたよ超走つたよ」

舞は陸上部のエースで、この地域でも指折りの選手らしい。

舞「2人はバイト？」

伊吹「ああ」

京矢「右に同じく」

舞「2人も、大変だね。って、こんなところで立ち話もあれだから体育館に行こ」

京矢「賛成」

~~~~~  
~~~~~

体育館での長い話しは終り俺は夢の世界から目覚めていた。

で、今は新しいnew教室にやって来たのです。

??「え」と、個人の紹介は後にするとしてまずは私の紹介だ」

教壇に俺の見知った人が立った。

悟「私の名前は達神悟。去年はCクラスを持っていたが、今年からはこのEクラスを担当することになった。担当は国語で生徒会の顧問もやっている」

この女性はさっきの説明もあつた通り達神悟先生。去年は俺たちの担任をしていた。

悟「私から言いたいことは一つ。面倒ごとは起こすなよ。私が大変だ。後、もう一つ、自分で出来ることは自分でしろ!!以上だ」

1つじゃない!やっぱりこの人適当だ。

悟「じゃあ、終り」

終わった!?

## 春風のプロローグ？（後書き）

### ・次回予告

??「始まった新学期。伊吹の周りの変わらない人たち。

次回『春風のプロローグ？

私かい？まだ、内緒だよ？」

## 春風のプロローグ？（前書き）

短いです。

## 春風のプロローグ？

4月7日（木）

舞「起つきろーーーーー！！」

伊吹「ふっ！？」

突然耳元で声を出されて俺は妙な声を上げてしまった。

舞「新学期早々に寝るなんて学生の本分から逸脱してるよ！」

伊吹「俺寝てたのか」

悟先生の話しはあの後、先生の愚痴に変わりバイトで疲れていた俺はいつの間にか寝てしまっていた。

??「伊吹くんが授業中に寝てるのって珍しいよね」

俺が目をごすると舞の隣にもう一人の女の子が立っていた。

七海「おはよう伊吹くん」

こいつは『園原七海』。高校に入ってからからの友達で俺たち仲良しグループの1人。性格は優しく、俺たちのフォローやくと言ってもいい。

伊吹「そう言えばお前も同じクラスか」

七海「酷い。忘れてたの？」

七海が手で顔を覆う。

伊吹「違う、違う！！俺、クラス名簿見てなかったから！！」

俺はとりあえず弁解をした。

七海「・・・ふふふ。冗談だよ」

伊吹「はあ。びつくりした」

七海「ホント？」

舞「七海ちゃんの冗談は冗談に聞こえないからね」

京矢「真に迫ってるよな」

いつの間にか京矢も来て、俺の机を囲み話が盛り上がり始めた。

京矢「そうだ、みんな放課後暇？」

今日は始業式だから学校は午前中だけだ。

舞「私は部活休みだからOKだよ！！」

七海「うん。私も大丈夫」

2人は大丈夫みたいだ。俺の予定は・・・



伊吹「俺は7時までなら大丈夫だ」

京矢「よし、なら決まりだ。じゃあ・・・」

舞「誘いますか」

3人の目の先には一人の女の子がいた。

いや、寝てたの方が正しいか。

しかも、それを誰も気にしたりしていない。それもそもはずだ。何せそれが彼女なのだから。

七海「起きてぽえみ」

ぽえみ「うにゅ。あと18時間45分32秒」

伊吹「どんだけ寝る気なんだよ!」

ぽえみ「出来れば一生」

舞「駄目人間だ!？」

京矢「しかし、それも理想の生活だな」

七海「いい加減に起きなさい」

七海がぽえみの髪を引っ張る。

ぽえみ「ななちゃん、私が悪かったから、引っ張らないで」

七海「それなら起きなさい」

七海は相変わらずぽえみには厳しいみたいだ。

京矢「それじゃあ行こうぜ」

昇降口に向かう前に俺の隣で眠そうにしている女の子ぽえみのことを紹介しようと思う。

『蛹鳥穂絵美』。いつもぽわぽわしていることからみんなから『ぽえみ』と呼ばれている。寝ることが大好きで体育以外の授業で起きているのを見ると幸せになれると言っジンクスがあるくらいだ。でも、ぽえみが本当に体育で起きているのかは男子の俺は知る由もない。

ということではえみは家のクラスの委員長です。

驚いた？

## 春風のプロローグ？（後書き）

### ・次回予告

??「放課後に遊びに行こうとした仲間たち。しかしそれを阻止する黒い影」

???「アタシを置いて遊びに行くなど、麺のないラーメン見たいなものだ!!」

??「次回『春風のプロローグ?』

これが物語の序章」

## 春風のプロローグ？

4月7日（木）

七海「で、今日は何処に行くんですか」

昇降口に着いた時、七海が京矢に今日の遊びを聞いた。

京矢「俺としてはカラオケかゲーセンが妥当だと思うんだけどな。皆はどっちがいい？」

歌が苦手な俺はすぐに答えを決めた。

伊吹「ゲーセン！！」

俺以外「カラオケ！！」

俺の思いは盤上一致で拒否された。

伊吹「しくしく……」

舞「伊吹くん泣かないで！？」

七海「そうだよ」

京矢「お前の歌が聞きたくて提案したんだからな」

伊吹「鬼！！」

俺たちが昇降口を出ると、知り合いがキョロキョロ何かを探していた。

京矢「ジュリア。どうした」

ジュリア「城島くんにみなさん」

彼女の名前は『ジュリア・如月・ルミエル』。俺たちと同じ2年生で生徒会の副会長である。名前から分かるように何処かの国のクオタらしい。

ぽえみ「そんなに焦ってどうしたの」

ジュリア「実は会長がいなくなっちゃって」

ぽえみ「またなんだ」

ジュリア「もし見つけたら」

京矢「そんな時は俺が連絡するわ」

ジュリア「ありがとうございます」

京矢「いいってことよ。あの人に迷惑掛けられてるのは俺やぽえみも一緒なんだからな」

うちの生徒会長はとていい加減な人だ。何となくで、サハラ的な砂漠に行ったり、カタゴンベ的な墓地に行ったりと思い立ったらすぐ行動をする人だ。だから京矢や如月さんが所属している生徒会や、ぽえみたち学級委員たちはいつも迷惑を掛けられている。

ジュリア「それにしても皆さんはお揃いで下校ですか？」

伊吹「今からみんなで・・・カラオケに行くんです」

ジュリア「カラオケですか。いいですね」

舞「ジュリアさんもうですか？」

ジュリア「ありがとうございます。でも私は会長を捕獲しないといけないので」

ぼえみ「残念」

伊吹「じゃあ、会長探し頑張ってくださいね」

ジュリア「はい」

???「・・・オケ・・・(ボソ)」

小さく何かが聞こえた気がした。

伊吹「何か聞こえなかったか？」

京矢「んや？聞こえなかったけど。みんなは？」

舞「私は何も聞こえなかったけど？」

七海「幽霊の声とか？」

ぼえみ「ななちゃんゝまだお昼」

京矢「ってことだ。お前の考えすぎだ」

伊吹「そうだよな」

バイトで疲れてるのかな。

伊吹「気のせいだよな」

???「んな訳あるか!!」

突然目の前から小さい女の子が飛んできて。

伊吹「ぶろふぁ」

俺の腹に右蹴りがめり込んだ。

伊吹「うつつつつつ（のた打ち回る音）」

???「まったく！アタシを置いて遊びに行くなど、麺のないラーメン見たいなものだ!!」

いや、それただのスープだとツツコミたかったが、腹の痛みでそんな余裕はなく、次に言葉を発したのは如月さんだった。

ジュリア「ふぁみ先輩!!」

ふぁみ先輩「にゅ？どうしたルミルミ？もしかして今日生理の日だから機嫌悪い？」



ジュリア「違います!!」

如月さんの拳骨がふぁみ先輩の小さい頭の中心にゴツンと音を立てて当たる。

ふぁみ先輩「痛いぞルミルミ!!カリブ海のような広い心のアタシもいくらなんでも怒るぞ!!」

ジュリア「怒りたいのはこっちです!!一体今までどこに行ってたんですか!!」

ふぁみ先輩「えゝとな、風になりたくてボールドウィン・ストリートを自転車で掛け降りてきた」

舞「ななみちゃん・・・ボールドウィン・ストレートってなんだか分かる?」

違っ、舞。ほとんど違っ。

七海「えゝと・・・ぽえみ」

この子自分じゃ分からないからって隣の友達に全部丸投げした!!

ぽえみ「うにゅゝ坂」

この子はこの子で一言でまとめた!?

伊吹「世界で一番急な坂だよ」

とりあえずこれ以上話が脱線しないようにまとめた。

ふぁみ先輩「最高に風だったぜ」

空を見上げながら感慨にふけっているこの人こそ、この私立大海歌原高校第99第生徒会長の『ふぁみ先輩』である。性格は見ての通り自由奔放で思い立ったらすぐ行動し、周りに迷惑ばかりをかけている。この人はまさに奇跡の体現者なのだ。

ふぁみ先輩「これこれ。人を奇跡の体現者と超絶美人とか言うな」

伊吹「人の心を勝手に読まないでください。後、超絶美人なんて世界の女性に失礼ですよ」

ふぁみ先輩「世界レベル!？」

シヨックを受けたのかふぁみ先輩はしゃがみこんでしまう。

伊吹「じゃあ行こうぜみんな」

京矢「お前ふぁみ先輩には容赦ないな」

この人に容赦や手加減なんて言葉は必要ない。

ふぁみ先輩「ま、待て!!アタシも連れてけ!!ふぁう!？」

ジュリア「先輩は仕事です」

如月さんに首根っこを持って校舎の方に持っていかれてる。

ジュリア「では、みなさん。また」

伊吹「また」

京矢「またな」

舞「まっ たね」

七海「また」

ぼえみ「またね」

俺たちは校門でて坂を折り始めた。

ふぁみ先輩「ヘルプ！！ヘルプ！！ヘルプ――――ヘルプ――――  
――！！！！」

時折、ふぁみ先輩の声が聞こえた。

## 春風のプロローグ？（後書き）

### ・次回予告

??「春は出会いの季節。それは彼も例外ではない。

次回『桜色リズム?』

風が彼の頬を撫でた。」

桜色リズム？（前書き）

メインヒロインの登場です。

桜色リズム？

「すーはー」

息を吸うと温かい春の伊吹が私の体を満たす。

「よし！」

私はドアを開けた。

4月8日（金）

悟「って訳でここのべからずのずの基本形と意味と活用系を答えろ  
城島」

京矢「ひらがなのざ行のう段です。意味はすに濁点を付けたもので  
活用系はすーやずゝ、ずずずず！！などがあります」

悟「さてと、園原。このバカを一年のクラスに転入させる準備は出  
来てるな」

七海「はい。さっき貰ってきました」

京矢「ノ

ン！！」

伊吹「何やってるんだか」

学校生活2日目。現在は4時間目で達神先生の古文だ。

しかし、古文なんて何の役に立つんだ？昔ある人が言ってたぜ。

『昔のことを気にしては前には進めない。前に向かって手を伸ばし必死にもがけ』

ふぁみ先輩が古文の追試の時に教師に啖呵を切っていた時の言葉だ。

しかし、暇だな。比較的に席が近い京矢と七海は達神先生と遊んでる。舞は少し離れた席で後ろ姿しか見えない女の子と話してる。なんか親しげだな。ばえみは寝てるし・・・・・・・・あつ、俺も眠くなってきた・・・・・・・・

京矢「伊吹。忌々しい古文は終わったぞ」

目を擦るといつの間にか達神先生はいなくなっていた。

舞「伊吹くん。今日は何処で食べる？教室？食堂？それとも屋上？」

伊吹「今日は・・・」

目をそらしてみるとぽえみが七海に起こされている。

伊吹「屋上に行こうぜ。今日は天気もよさそうだしな」

京矢「じゃあ場所取りに行こうぜ」

伊吹「ああ」

七海「私たちもすぐ行くから」

ぽえみ「うにゅ」

ぽえみは半覚醒状態で挨拶した。

舞「そうだ伊吹くん」

教室を出ようとした時舞に呼び止められた。

伊吹「どうした？」

舞「他の友達も連れて言って紹介したいんだけどいいかな」

伊吹「もちろん。でも、一緒に来ればいいんじゃないか？」

舞「その子、悟ちゃんに頼まれて副教材を資料室に運んでるから」



伊吹「んじゃ、また後でな」

俺は先に屋上に向かった京矢を追いかけた。

~~~~~

屋上に着くとすでに京矢がシートを敷き、奇妙な踊りを踊っていた。

伊吹「シートのことを失念してた。用意がいいな」

京矢「そうだろ」

気のまわる奴だ。

京矢「しかし、屋上は人が少ないな」

伊吹「仕方ないだろ」

この学園での食事場所は大まかに教室、学食に分けられる。しかし、極小の奴らは自分のお気に入り場所で食べる。それが俺たちの屋上だ。

伊吹「みんな遅いな」

そう考えていると屋上の扉が開いた。

ばえみ「やつと着いた」

七海「正しくは私に引きずられたの間違いじゃない？」

京矢「ぼえみ〜七海〜こつちだ!!」

七海「今行く」

七海がぼえみの手を引いてシートに座った。

ぼえみ「風が気持ちい〜」

七海「ホントね」

そう言えばここは元々ぼえみの昼寝スポットだったな。

七海「ねえ？伊吹くん。舞ちゃんは」

伊吹「舞なら・・・」

俺が言いかけたときバン!!とドアが開いた。

舞「はあ・・・はあ・・・はあ・・・お待ちせみんな」

飛び出してきた舞は息を切らしていた。

伊吹「紹介したい子って言うのは？」

舞「そこにいるよ」

と舞は階段の方を指差した。

舞「出てきて!!」

??「はい」

出てきたのは長い黒髪とリボンが目を引く女の子。

咲美「花咲咲美です。よろしくお願いします」

まるで桜のような女の子だった。

桜色リズム？（後書き）

・次回予告

??「新しい少女を迎え、始まった新しい時間。

次回『桜色リズム？』

彼女の新しい友達』

感想お待ちしております。

桜色リズム？（前書き）

感想をお願いします。

桜色リズム？

4月8日（金）

京矢「それでは自己紹介タイム！！ドンドン！！パフパフ！！」

ぽえみ「ぱふ～ぱふ～」

京矢がいつも以上に盛り上げている。

伊吹「京矢。別に合コンのノリでやるなどは言わないから少しは落ち着いてくれ。花咲さんが戸惑ってるだろ」

花咲さんは戸惑っているのか舞の顔と京矢の顔を交互に見ている。

七海「花咲さん。座って」

桜美「ふあ、はい！」

花咲さんは七海と舞の間に座った。

京矢「じゃあ、自己紹介！！つてもな……」

舞「ね？」

自己紹介も始めずに2人の間で会話が成立してる。

ばえみ「みんなと同じクラスだもんね」

伊吹「うえ!？」

俺は急に衝撃の事実を言われて変な声を出してしまった。

舞「もしかして、知らなかったの？」

伊吹「はい……」

京矢「そういうところお前の悪いことだと思うぞ」

伊吹「はい……」

まったく言葉が返せなかった。

舞「じゃあ、クラスメイトのことなんてどうでもいいと思っている
伊吹くんに自己紹介をしてあげて」

うう……泣きたいよ……

桜美「花咲桜美です。去年は2・Cでした」

舞「私の隣の席で、2人で話したら仲良くなったんだ!」

思い返すと……いたような気がする。

伊吹「いたな!」

ベシ！！

伊吹「痛ツ！！」

七海に頭を叩かれる。

七海「デリカシーがない子はポイですよ」

伊吹「ポイ！？」

七海「冗談ですよ」

背筋が凍る冗談だ……

咲美「私友達が少ないので……」

花咲さんが頭を下げる。

桜美「よければ私と友達になってください」

伊吹・ぽえみ「嫌だ」

舞・七海・京矢・桜美「！？」

舞と七海と京矢は俺とぽえみを啞然として見ており、花咲さんは表情を強張らせていた。

伊吹「俺たち変なこと言ったか？」

舞「言ったかって……」

舞と七海がいつにもなく表情を暗くさせる。

伊吹「だってな」

ぽえみ「ね」

おそらく同じことを考えてるぽえみと目を合わせた。

京矢「そう言うことが……」

京矢も気づいたらしい。

桜美「……」

無言で俯いている花咲さんに俺たちは告げた。

伊吹「花咲さん」

桜美「はい……」

伊吹「俺たち、そうじゃないと思うんだ」

桜美「えっ……」

ぽえみ「友達のなり方」

桜美「友達のなり方……？」

伊吹「こうしてみんなで話してるだけで俺たちもう友達だろ？そんなこと言わなくなつていいんだよ」

ぼえみ「うん」

俺たちの気持ちを伝えると花咲さんは泣いていた。

伊吹「ちよっ！？どうしよ！！みんなどうしよ」

舞「あゝあ。女の子を泣かせちゃった」

七海「お仕置きですね。ふ、ふ、ふ」

京矢「ふふふ、ハハハハ！！」

京矢は笑うことすら堪えられていなかった。

ぼえみ「伊吹くん、女の子を泣かせちゃダメだよ」

伊吹「ちよ！？ぼえみも共犯だろ！！」

桜美「う．．．う．．．」

伊吹「ああ！！ごめんなさい」

桜美「う．．．う．．．違ふんです。嬉しいんです。こんなこと言われたの久しぶりだから．．．」

その言葉を聞いて安堵した。

伊吹「改めてよろしくな。花咲さん」

伊吹「はい」

この日俺たちに新しい友達が出来た。

桜色リズム？（後書き）

・次回予告

??「あるところに喫茶店があつた。

そこでは男たちが会合を開いていたのだつた。

次回『男たちの穴場』

いつたいこれは何だ？」

男たちの穴場（前書き）

女の子もちゃんと出ます。

男たちの穴場

4月9日（土）

??「合コンがしたい」

伊吹「やればいいじゃないですか？一人で」

??「ぬお！？お前それでも男か！？ジェントルマンたるものまず合コンだろ！！」

伊吹「俺の知ってるジェントルマンは合コンなんてしません」

??「ジェネレーションギャップか」

伊吹「俺とあんたは世代どころか住んでる世界が違うと思う」

??「なんだよ。女の子とイチヤイチャスポスポしようぜ兄弟」

伊吹「兄弟って歳じゃないだろ40代」

??「俺の心はいつまでも10代なの！！」

この髭面人こそ俺のバイト先の店長『綾崎安男』。この喫茶店『El amores probable』のマスターだ。基本は面倒見のいいおっさんなのだが変態だ。

伊吹「しかし、暇ですね・・・」

安男「そうだな。伊吹を弄るのも飽きたしな」

伊吹「そう言うことは本人の前で言わないでください」

安男「でも、お前の言うことももつともだ。まったく純情女子高生でもこないもんか」

伊吹「そんなこと一言も言ってます。それに来るわけないでしょう」

このお店には客の入りやすい時間帯がある。しかし、今の時間学生が入ってくることはほとんどない。例外と言ったら何となくでバイトに入る京矢やノリで来るふぁみ先輩か、七海が部活の助っ人で朝早くから出掛けていて昼過ぎまで寝ていたばえみくらいだ。

安男「高校生〜高校生〜」

カランコローン!!

安男「高校生!?!」

ドアを開けて入って来たのは。

京矢「呼びました?」

制服の京矢と

かもめ「マスター。またあれですか」

この喫茶店の正職員『木原かもめ』さん（年齢不詳）だ。

安男「なぐんだ。京矢とかもめくんか」

京矢「なぐんだとは何ですかマスター」

京矢は口をとんがらせる。

安男「すまん、すまん。冗談だ。しかし、2人とも今日はシフト入ってなかったはずだが・・・」

京矢「俺は飯食いに来たんすよ。生徒会の仕事が長引いて、飯のこと考えてたらそついや今日は伊吹がシフト入ってるなと思って来たんだ」

伊吹「そんだけで来たのかよ。でも、何で仕事が長引いたんだ？」

京矢「実はふぁみ先輩が『地デジ的な塔に行ってくる』って逃げて・・・」

俺は店内にあるテレビの電源をリモコンで付ける。

『この電波はこのふぁ（ピッ）』

安男「ははは！！ふぁみの譲ちゃんも相変わらずだな」

伊吹「今からあれを迎えに行く如月さんが気の毒だな」

俺はどこにいるかも分からない如月さんに心の中で敬礼をした。

安男「で、かもめくんはどうしたんだ？」

かもめ「私は家にいても暇だったのでお手伝いに来ちゃいました」

安男「それはありがたい。と、言いたいところだが正直仕事がないんだよな」

伊吹「だから暇だったんですね」

かもめ「そうですか」

京矢「取りあえず、注文聞いてくれ」

しょうがなく俺は注文を聞くことにした。

伊吹「ご注文は何でしょうか？（営業スマイル）」

京矢「女の子をくれ」

伊吹「分かりました（笑……）」

俺は窓の外に京矢を放り出した。

京矢「俺が悪かったよ」

かもめ「伊吹くん入れてあげようよ」

伊吹「そうですね」

しょうがなく俺はドアの前に立つと、

安男「待て。まだ開けるんじゃない」

伊吹「なんですか？マスター？」

安男「ここで京矢を入れてやるのは簡単だ。しかし、ここで入れてしまえば・・・」

伊吹「ここで入れたら・・・？」

安男「面白くないだろ」

伊吹「さすがマスター！！」

かもめ「入れてあげましょうよ・・・」

安男「こんな男だらけの職場だ。これ以上男が増えてたまるか。と言いついでかもめくん。お友達の女の子を連れてきなさい。合コンをしよう」

伊吹「まだ諦めてなかった!？」

ここは喫茶店『E l a m o r e s p r o b a b l e』。ここでは4人の男子と1人の美女があなたの来店をお待ちしております。

かもめ「それじゃあ・・・」

伊吹「今日も仕事頑張りますか」

安男「よろしく頼むぞ」

京矢「俺も中に入れて!!」

男たちの穴場（後書き）

・次回予告

?? 「晴れて彼らの仲間になった彼女。

彼女は彼らをどう見ているのか？

次回『彼女からの視点』

彼女からはどう見えているのか？
』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0324y/>

恋愛模様 共通編

2011年11月17日17時37分発行